

〔論文〕

転職悪玉説の誕生をめぐる試論

——明治時代後期に注目して——

安 藤 り か

名古屋学院大学現代社会学部

要 旨

本論は、わが国に現在もお流布する転職に対する根拠不明な否定的観点を「転職悪玉説」と呼ぶこととし、その起源と考えられる時点まで遡り、そこから実際の転職悪玉説の言説となって文献に登場するまでの過程を整理することによって、転職悪玉説が誕生した背景要因を可能な限り明らかにすることを目的とした。その結果、①現代と同様の“職業替え”という語義での「転職」概念の誕生が明治時代後期であったこと、②その背景には明治維新以降に整備された近代的な戸籍による個人単位の世界移動の把握があったこと、③明治時代に全国に普及した“勤勉な日本人”イメージの対極としての“怠惰な遊民”像が転職者に被されたこと、などの諸点を指摘した。また、転職に言及した最早期の文献4件の検討から、当時から転職に対しては否定的観点が向けられていたことを明らかにした。

キーワード：転職、転職悪玉説、明治時代、勤勉な日本人、遊民

Essay on the emergence of “Tenshoku Akudama (it is wrong to change jobs) Theory”;
focusing on the late Meiji Era

Rika ANDO

Faculty of Contemporary Social Studies
Nagoya Gakuin University

目次

- 1 はじめに
- 2 「転職」概念の誕生
- 3 江戸時代後期における「転職」
- 4 明治時代における「転職」
- 5 言説の検討—転職悪玉説の誕生
- 6 まとめと展望

1 はじめに

1.1 問題意識

わが国において転職は、労働条件や収入面のみならず、職業スキルの蓄積、社会的信頼度の面などで有形無形のハンデを負うキャリアとして否定的観点で捉えられることが多かった（安藤，2019）。近年では、とくに昨2020年以降のコロナ禍以降、若者を中心に転職に前向きに臨む人々が増えてきたとされるが（たとえば、マイナビ，2021）¹⁾、だからといって、転職に対する捉え方が全面的に肯定的観点に取って代わったとも言い切れない。

たとえば、筆者の担当する「キャリアデザイン」の授業で学生に意見を求めると、“自分は絶対に転職したくない”“転職はキャリアの失敗だ”といった転職に対する否定的な捉え方——転職悪玉説と呼ぶことにする——が例年一定割合聞かれるが、それは今年（2021年）も同様である。もっとも、そう考える理由を問うと、“収入が減るとどこかで聞いたことがあるから”²⁾“日本人は真面目だから（一度決めた道を安易に投げ出すようなことはしないはずだ）”と言うぐらいで、他にこれといった明確な答えが返ってくるわけではない。また、学生のみならず、社会人に同じことを尋ねてみても、似たような曖昧な返答しか得られないことが珍しくない。

これから推測されるのは、転職悪玉説は現状に基づくものというよりは、旧来の社会から無批判に引き継がれている一種の先入観なのではないか、ということである。しかし、その推測の正否を検討しようにも、そもそも転職悪玉説がわが国の歴史上の何時如何なる経緯で生じたのかが不明であり、その解明を図った文献や研究も見当たらない。いわば転職悪玉説とは、あたかも実態があるかのごとく社会に流布しているものの、実は誰もその正体を見たことがない幽霊のようなものではないだろうか。

-
- 1) この「マイナビ転職動向調査2021年版」（2021年3月18日発表）は、「転職活動を始めるにあたり、新型コロナウイルスはどのように影響しましたか」という質問に対して、転職に積極的になったという回答は36.9%で、転職に消極的になったという回答の19.0%の約2倍であったとし、とくに20代男性の51.2%が転職活動に積極的になったと回答したと報告している。
 - 2) “転職＝減収”説は、一見の説得力を持つ。しかし、萩原・照山（2016）は、賃金・労働条件・勤務地・人間関係に関する不満といった転職理由の違いによって、年収増減への効果が異なることを明らかにし、たとえば、賃金不満を理由とする転職においては転職しなかった場合よりも年収が増加することを示した。十把一絡げに“転職＝減収”と決めつけるのは実態にそぐわないと言える。

しかしながら、冒頭でも触れたように、コロナ禍で転職をめぐる状況は変化しつつある。また、コロナ禍以前から、雇用の安定性が比較的高い正社員（45-54歳）ですら、61.2%は転職を経験していることが報告されている（リクルートワークス研究所、2020）³⁾。つまり、転職は、それを実行するか否かは別として、今や多くの人が一度や二度は自分の課題として対峙せざるをえないキャリアの選択肢となったのである。それにもかかわらず、その対峙の大前提が旧社会からの幽霊のような転職悪玉説であるとしたら、それは現代に適した在り方とは言えないだろう。

したがって、今後の社会における、転職可能性をも視野に含めたキャリアデザインを検討する上では、個々人の信念の中に無批判に取り入れられているかもしれない転職悪玉説の成り立ちについて適切に理解しておくことが重要である。

1.2 本論の目的

そこで本論では、転職悪玉説の起源と考えられる時点まで遡り、そこから実際の転職悪玉説の言説となって文献に登場するまでの過程を整理することによって、転職悪玉説が誕生した背景要因を可能な限り明らかにすることを目的とする。

なお、予め触れると、本論では明治時代に関する事項を多く扱う。明治時代の時期区分には何種類かがありえるが、本論では、大日本帝国憲法発布1889（明治22）年を境とする明治時代前期と明治時代後期の2区分で把握する。

また、本論では、筆者が文献から要約して引用する場合は斜体で示すこととし、その要約文中に引用元からの直接引用がある場合は「 」で括弧で示すことにする。

2 「転職」概念の誕生

2.1 明治時代後期における語義の変化

「転職」という言葉は、「職業をかえること」（大辞林）（以下，“職業替え”と略す）を意味する。とくに現在のわが国では、勤務先企業を変わる「転社」を指す場合が多い（山本、2008）。

ところが、少なくとも明治時代の初期においては「転職（当時の表記としては、轉職）」は、官僚や軍人、政治家など、公人の異動や転籍などを示す言葉であり、一般の人の職業替えを示す言葉ではなかったようである。たとえば、国立国会図書館デジタルコレクション（明治・大正時代の文献約14万8千冊を所蔵していた近代デジタルライブラリーを継承）で、「転職」で全文検索すると（2021年4月30日情報確認）、出版日が最古の1874（明治7）年の行政文書「布告類編」以降の6件の文献では、公人の異動等を指すものとして「転職」を使っている⁴⁾。また、同検索を用いて筆者が調べた

3) この「全国就業実態パネル調査」（調査時期2020年1月）によると、45-54歳の正社員のうち、退職回数0回（すなわち転職をしたことがない）のは38.8%（男性43.8%；女性26.5%）である。

4) ただし、この中の1冊である「柳北遺稿」（1892）では、文学者・ジャーナリストの成島柳北（1837-1884）が自身の複数回の職業替えを「転職」として語っている箇所がある。家督継承による将軍侍講（将軍に進講する学者）に始まる幕府要職を経て、維新後の生命保険会社創設者、新聞社社長等という成島の経歴は、た

限りでは、公人以外の転職に言及した最古の用例は、1900（明治33）年の岸本能武太著「倫理宗教時論」（5章で後述）であり、キリスト教伝道者から実業家への転職について言及している。

一方、豊富な初出用例で知られる小学館「日本国語大辞典」に掲載されている「転職」の最古の用例は、1907（明治40）年の国木田独歩著「暴風」の『判事に転職（テンシヨク）するまでは全くの安心とは行かないと言った』である。同義語の「職業替」については、1909（明治42年）の夏目漱石著「それから」から『急に職業替（シヨクゲフガへ）をする気になったから』が用例として引用されている。

さらに、「転職」の対語である「定職」については、国立国会図書館デジタルコレクションでは3件がヒットしたが、現代的な「きまった職業」（大辞林）という語義の例は無かった⁵⁾。また、日本国語大辞典では、3例が載っており、そのうち最古のものは、1911（明治44）年の正宗白鳥著「泥人形」の『去年から定職を失っている重吉には』であった。

このように、職業替えという意味での「転職」関連の用例は、1900（明治33）年～1911（明治44）年の10年程度に集中して登場している。したがって、この明治時代後期に、「転職」という言葉の語義は、“公人の異動等”から“職業替え”へと変化したと見ることができるだろう。

2.2 「はたらくこと」の感覚の変化

ところで、この「転職」の語義変化の10年ほど前にあたる1890（明治23）年頃には、武田（2008）によれば、「労働」という言葉が定着した。同著は要約すれば以下のような興味深い仮説を提出している。

近世までは「労働」には、「労働」という漢字表記が使われており、その言葉の指すところは単に“身体を動かすこと”，あるいは、その効用を含めて“はたらくこと”であった。しかし、明治時代になり、西洋から経済学用語として *labour* という日本語には無い概念が輸入された。当初、*labour* は、「勤労」「力作」「労力」などの多様な言葉に訳されていたが、結果的に、日本で新たに考案された人偏のつく漢字「働」を用いた「労働」という熟語が発明され、使われることになった。そしてその際、「労働」には、単に“はたらくこと”という意味を超えて、“骨折ってはたらく”というニュアンスが付与された。われわれ現代人は、そのような語義の違いを意識しないまま、「労働」すなわち“骨折ってはたらく”ことが、昔からの日本人の“はたらくこと”の捉え方であるかのような固定概念を持ってしまっているのではないか。

このように武田（2008）によれば、1890（明治23）年頃から人々の“はたらくこと”の捉え方が変化した。また前節で述べたように、その10年後の1900（明治33）年からは“職業替え”という現

しかに広義の転職ではあるが、本論では当時の一般的な転職とは性質が異なる「公人の異動等」により近いものとして解釈した。

5) ただし、この3件の中で、1877（明治10）年の「諸規則条例願届式心得」には「定雇用職工」という言葉が見られる。「定職」という熟語ではないにせよ、職工については「定雇用」という考え方があったことをうかがわせる。

代と同じ語義の「転職」が文献に登場し始める。それらを考え合わせると、やはりこの明治時代後期に、人々のはたらくことへの感覚に何らか大きな変化が生じ、その中で転職という現象が（おそらくは、わが国の歴史上初めて）人々の興味関心の俎上に載ってきたという流れを推測することができる。すなわち、まずは、現代的な意味での「転職」概念が誕生した時期として、明治時代後期を想定することができるのである。

この想定を補強するためには、その変化を迎える以前の人々の職業替えに関する認識との比較が必要である。そこで次章では、明治時代に先立つ江戸時代後期に遡って、当時の職業替えの認識を探ることとする。

3 江戸時代後期における「転職」

一般に、江戸時代といえば、「士農工商」の身分制のもと、出生身分と不可分の職業が生涯または何世代かに渡り厳密に固定化しており、職業替えなど不可能であったかのような印象が強い。しかし、近年の研究⁶⁾が明らかにするところによれば、実態としての職業替えが無かったわけではなく⁷⁾、中村(1999)によると、とくに江戸時代後期にはむしろ活発に行われていた。しかしながら、封建制度のもとにあった当時、その現象は、現代で言う転職とは大きく異なる感覚で捉えられていたようである。以下の本章では、当時の職業替えの感覚を探る上で示唆が多い先行研究を参照し、3つの視点から論を進める。

3.1 職業替えの不可視性

第一の視点は、近世の社会的移動⁸⁾の“見え方”に関する中村(1999)の研究である。同著は、明治維新を境に急激な職業の移動が生じたとする従来の仮説に対して、職業の移動は明治維新に先立つ近世から一貫して行われていたと主張している。同著はその主要な根拠として戸籍制度との関連を指摘しているが、要約すれば以下になるよう。

当時の戸籍にあたる人別帳には、出生により決定する一次帰属（例；〇〇村百姓何某倅何某）

-
- 6) 渡辺(2000)によると、1990年より「身分的周縁」という研究視角が提起されており、これは身分や職分を分析するに際して、「分析対象とした存在について、彼らをとるまく社会的諸関係の総体の中で把握するきわめて関係論的なものとなる」ことを特徴とするアプローチである。たとえば、労働観については、横田(2000)が、1690(元禄3)年に発行された職業百科事典「人倫訓蒙図彙(じんりんきんもうずい)」の分析から、江戸時代中期以降には、中世的な身分に基づく貴賤の序列意識ではなく、「庶民=民間=平人にとって必要な、正統な生産活動かどうかという観念」が存在していたと指摘しており興味深い。
- 7) たとえば、深谷(2006)は、金銭と引き換えに武士になろうとする者など、身分境界を越えようとする上昇志向「身上がり」を実現した様々な例について論じている。そのような身分境界を越えることですら可能ならば、まして同一身分内の職業替えなどはいっそう柔軟に実現したのではないかと思われる。
- 8) 中村(1999)は「移動」もしくは「社会的な移動」という用語を、「人々がコミットする社会関係を離れ、別な社会関係のなかに入っていくこと」と広義に定義づけて用いているが、その具体的内容は主に転職である。

と、一時的な出奉公としての二次帰属（例；下男何某）という二重の記載が見られるが、これは当時の生活には欠かせない土地や技術などの権利が、既得権として血縁によって継承されていたことに起因する。したがって、当時は個人が“他の仕事に変わることを、あくまでも二次帰属の一時的な変更とみなすことによって、既得権の継承を左右する一次帰属には変更は無いものとして人々に了解されていたという。つまり、「個人の転職が認められないわけではなくて、百姓の子（ないし武士の子）は何を職としようとする一次的には百姓（武士）でありつづける、という原則」が人々に了解されていたため、移動が見えない存在になっていたのである。ところが、明治期の戸籍では、基本的に個人レベルの情報が記載されるようになり、職業についても家の構成員を家業で一括するのではなく、構成員各人について職業を記載する形式に変更されるなどの諸制度が整備された。また、全国規模での統一戸籍への編入が指向され、「個々人は、かつてのように出生した村落等の成員として生涯を送る存在ではなく、職業的にも地域的にも広く歩く存在」となり、国家が個々人の移動を掌握できるようになった。そして同時に、個々人もまた「移動が可能であるという理解を持ち」「現に行われている事実的な移動を、移動として再認識するようになる」状況が生まれ、結果的に移動が見えるものになったのである。

このように中村（1999）は、江戸時代にも実態としての職業替えは行われていたものの、当時の人々はそれを職業替えとして認識しておらず、明治になって近代的な戸籍制度が普及したことによってようやく職業替えが職業替えとして認識されるようになったと主張しているのである。また、同著は、そのような職業替えの可視化は、1886（明治19）年に「寄留」（完全に移籍するのではない、一時的な滞在）に関して本人による申請が義務づけられたことによっていっそう普及したとしている。これを裏返して言うなら、江戸時代にはそもそも「転職」という感覚や概念自体が無かったということになる。そうであるなら、転職悪玉説が生じるとは考えにくい。前節では、「転職」概念の誕生時期として明治時代後半を想定したが、転職悪玉論の誕生時期もそれ以降と見るのが自然だろう。

3.2 「遊民」との共通項

ただし、江戸時代においても、ある特定の属性を備えた人々の職業替えに限っては、当時から既に批判的な捉え方が存在していた。そこで第二の視点として、「遊民」概念を取り上げる。

守本（1985）によれば、遊民は儒教から援用された概念であり、大要は「遊んで四民（筆者注：士農工商）の業を為さず、物財を費やす者」であり、「いわゆる穀つぶし」である。同著によれば、誰を遊民とみなすかについては変遷が見られ、江戸時代初期に遊民視されたのは幕府の大名対策の結果生み出された大量の浪人であったが、貨幣経済が進展した江戸時代後期においては、都市部で日雇い職などに就いていた離農農民が、封建社会の経済的基盤を揺るがす存在として遊民視されるようになった。

また、阿部（1999）によると、それらの離農農民の中には、多様な理由で人別帳の記載から外れた「無宿」となって都市に流入する人々も相当数いたが⁹⁾。当時の江戸はそのような“違法な”移住

9) ここでは、論点を明確にするため、「無宿」の代表的出自である人別帳に記載の無い「帳外れ」のみを無宿と

者ですら職にありつけたというほどの求人過多であった。さらに、南（1978）によれば、移住者増加による貧民層の膨張という課題を抱えた江戸では¹⁰⁾、幕府が人口過密化と治安維持の対策として度重なる遊民や無宿の取締令を発令したが、その際の幕府の解釈は、「元来右無宿共之儀は、百姓は農業を怠、町人は夫々之渡世を不致、身持放埒故、無宿ニ相成」（御触書天明集成）といった触書にうかがえるように、遊民や無宿の出現を社会問題とはせず、当事者の自己責任に帰するものであった。

この遊民や無宿に対しての否定的なイメージが、職業替えという点において共通性のある転職に転化した側面もあったのではないだろうか。つまり、明治時代後期になってようやく可視化された転職という（認識としては）新規な現象に遭遇した人々が、その現象を解釈する枠組みとして、いくらかでも馴染みのあった遊民や無宿のイメージを転職に被せたのではないだろうか。

もっともこれは現時点では、憶測の枠を出るものではない。しかしながら、少なくとも「遊民」という概念が明治時代にも引き継がれたのは確かである。たとえば、夏目漱石著「彼岸過迄」の小説に登場する「高等遊民」（高等教育は受けたが、経済的な必要がないため、職につくことなく暮らしていける人：大辞林）はよく知られている例である。わざわざ「高等」とつけているのは、「高等」ではない、江戸時代から引き継がれた社会的逸脱者としての遊民イメージが、明治時代後期にも依然として生きていたからであろう。そうであるとすれば、「転職者＝遊民」という連想が存在していた可能性もあながち否定できるものではないだろう。

3.3 「勤勉な日本人」の強調

第三の視点は、今日自明のように浸透している“勤勉な日本人”という国民性のイメージの由来と転職悪玉説との関わりである。

江戸時代の半ば以降、都市部を中心に貨幣経済が進展し、一方の農村部では離農による生産力低下という現象が進展するようになった。安丸（1999）によれば、この頃から明治時代にかけて、「広範な民衆のあいだに首尾一貫した自己規律を樹立しようという動向」が生じ、「勤勉、儉約、正直、孝行等の実践をめざす運動として展開」した。また、それは「こうした徳性を身につけなければただちに自分の家なり村なりが没落してしまう」という危機意識を背景とするものであった。同著の本論に関連する部分を要約すれば以下になるよう。

江戸時代中期から、比較的裕福な町人に普及したのは石田梅岩（1685-1744）の提唱した石門心学を始めとする心学思想であり、それは家の没落を防ぐ方法として、奢侈・遊芸・親不幸などの悪習を克服し、儉約・正直・孝行などの実践を旨とするものであった¹¹⁾。また、江戸時代後

したが、阿部（1999）によると、出奔者を出した家や村に課せられる責任問題を回避するために、実態は「無宿」同然でありながら、たてまえ上は人別帳に記載がある者なども多数いた。したがって、「無宿」と「有宿」の区分は実際にはかなり難しい問題であるという。

10) 南（1978）は、1733年（享保18年）に江戸で疫病が流行した際の町奉行所の調査結果を紹介している。それによると、当時の町方人口の35～36%は疫病が流行しても自力で薬の服用さえできない者たちであった。

11) 阿部（1999）によると、1790（寛政2）年に、無宿の収容施設として江戸の石川島に設立された人足寄場に

期から増加する商家の家訓の多くも心学思想に基づくものであり、やがて心学思想は農村にまで普及した。一方、ほぼ同時期に、二宮尊徳（1787-1856）、大原幽学（1797-1858）などによる荒廃した村々を対象とした農村復興運動が展開した。それらの運動は、怠惰・飲酒・博奕などの悪習が精神の内部まで浸透していることが窮状の根本にあると主張し、遊芸の禁止や儉約とともに、休日の制限と早起き・夜業などの勤労の規定を含む新たな生活習慣の獲得を課すものであった。こうして荒村から復興した村のいくつかは、明治時代中期以後の官製国民運動の中で“模範村”として全国にくりかえし宣伝された。これらの思想運動の普及によって、貧富や幸不幸の原因が自己規律の有無にかかっているかのような外見が生じ、それが社会体制の問題を覆い隠し、結果的に民衆の道徳が天皇制イデオロギーの中に組み込まれていった側面があった。

江戸時代から明治時代への移行期に、悪習を克服して勤勉に努めることを奨励し、幸不幸の自己責任性を強調するこのような思想が、個人の心がけのレベルを超えて、運動として全国に普及したことは注目すべきである¹²⁾。

前述のように本論では「転職」概念の誕生や転職悪玉説の誕生時期として明治時代後期を見当しているが、とくにその時期には、学校教育において二宮尊徳（1787-1856；天明7年-安政3年）の逸話が導入された。すなわち、それは1900(明治33)年の検定教科書に登場したのを始まりに、幾田(2005)によれば、国定修身教科書5期すべてに現れ、採録数は明治天皇に次ぐものであった。また、1911(明治44)年には、二宮は小学校唱歌の題材になった。さらに、大正末期には、1924(大正13)年の愛知県や1930(昭和5)年の大阪府の例などを再早期とし、二宮の彫像が小学校の校庭に設置されるようになった(籠谷, 1997)。その向かった先が、安丸(1999)が指摘するようにイデオロギー性だったのか否かに言及することは本論の範囲を超えている。しかし、そのように、江戸時代後期に端を発する勤勉像が、授業・歌・視覚を通して子ども時代から刷り込まれることによって、昔から日本人が勤勉であったというイメージが定着した側面があったのではないだろうか¹³⁾。

おいても、石門心学の講話による教化が行われ、人足の共感を得るのに成功し、その影響で社会復帰が早まった人足も多かったとされる。また、同書によると、人足寄場は、「反社会的傾向を持つ無罪の無宿を、矯正授産し社会復帰させる保安処施設」として専門家の評価が高い一方で、「教育刑と勤労尊重の理念は、かつて石川島人足寄場のうちに、ひそかに種子が蒔かれていたことを信じて疑わない」という解釈も提示されているとのことである。

- 12) 荒川(2002)は、日本において、近代社会の秩序形成が極めて短期間に実現した理由として、安丸の指摘したような農村社会の内から進展した社会的規律化が、学校、軍隊、工場等における近代的な規律化の先行条件として機能したことをあげている。
- 13) 千輪(1906, p.234)によれば、財閥の当主・森村市左衛門(1839-1919)はアメリカ視察をした際に、アメリカ人の熱心な働きぶりに感銘を受け、「彼(筆者注：アメリカのこと)に遊業の民なく、我(筆者注：日本のこと)に徒食の輩多き所以のものは、蓋し労働を神聖視すると否とによるのである」とコメントしたという。江戸時代の教育を受けた明治の財界の巨物は「勤勉な日本人」イメージを持っていなかったことがうかがえる。

そして、そのような勤勉な日本人が理想の極にあるとするなら、その対極には自己を律せず勤勉ではない（かのように見える）遊民が位置づけられる。相手が遊民なら貧しかったり不幸であったりしても、周囲は大手を振って、怠惰な社会逸脱者として非難できるわけである。場合によっては、“勤勉な日本人”イメージは、常に比較対象としての“怠惰な遊民”的存在を必要としているのかもしれない。前節では、明治時代後期に“転職者＝遊民”という連想があった可能性について触れたが、それに“勤勉な日本人”との比較によっても転職は非難すべき行為だという観点も加わり、それらの混合が転職悪玉説の誕生に寄与したと考えもそれは不自然ではないだろう。

以上の本章を小括すると、江戸時代後期における職業替えの認識の特徴として、①職業替えという意味での「転職」という感覚や概念自体が無かった、②ただし、職替えをする存在としての遊民や無宿に対しては否定的なイメージが存在し、またそのイメージは明治時代にも引き継がれた、③勤勉や自己責任を奨励する思想が全国規模で普及したが、その対極として、職替えを社会的逸脱とみなす観点も強まった、ということが言えるだろう。

4 明治時代における「転職」

さて、1868年の明治維新の後、新政府によって「四民平等」の各種政策が敷かれ、居住・職業・結婚の自由や、農民や町人が名字を名乗ることなどの自由が認められるようになった。そして、ここまで述べて通り、明治時代後半には転職が転職として認識されるようになった。とはいえ、そのプロセスは江戸時代の身分制の影響を強く受けるものだったようである。以下では、それらの諸点について述べる。

4.1 転職の階層性

ここでは、前章に引き続き中村（1999）による移動¹⁴⁾の研究を取り上げる。まずは、以下で明治時代の移動に関する同著の指摘を要約する。

すなわち、戸籍制度の整備による移動の可視化の一方で、「戸籍制度とは別なニュアンスをもつ、移動の見え方の変化」も生じてきた。それは「これまでにはなかったような人のうごきが可能であるという了解の出現であり、その了解に従ったふるまいの出現」であった。しかし、そのふるまいはすべての人々に同質に生じたのではなく、「しばしば親と同種の職に子もつくという職業的連続性を伴って行われ、かつなんら社会的地位を変更しないもの」であった。最初に移動の可能性を自覚したのは、士族の子弟であり、「高等教育を受けて（国家試験を受け）軍人や官員となるという移動のタイプ」が生じた。1900（明治33）年代に入ると、「実務教育を受けて実務につくという移動」が自覚され、中等学歴を取得した地主や商店主の子弟が移動をす

14) 中村（1999, p. 114）は、ここで女子の移動を含めていない。その理由は、女子の移動は、婚姻により、男子の各種移動パターンに相乗りした形で生じるためであるとしている。

ようになった。さらに1920（大正8）年頃になると、自作・小作農の子弟が「高小卒（筆者注：高等小学校卒）の学歴を取得して農村から都市に流出し、大企業の工員などとして勤めるというかたちの移動」が出現したが、社員になるには中等学校以上卒、工員となるには高等小学校卒、徒弟になるのは尋常小学校卒の人々といったように学歴との対応関係ははっきりしていた。

つまり、中村（1999）によると、明治時代には「四民平等」が謳われるようになったものの、実際の転職においては旧来の身分制の拘束を受けており、高い学歴を獲得した身分制の上層に位置していた人々から順番に転職の可能性が開け、また、転職を実行したのである。そして、旧来の身分によらず大半の人が転職の可能性を自覚し、それに伴う行動を起こし始める状況の出現には1920（大正8）年頃まで待たねばならなかったのである¹⁵⁾。

4.2 「転職」の第一世代

前節で述べたように、本論では現代的な意味での「転職」概念の登場時期として、明治時代後期を想定している。その当時は、上記の中村（1999）が示した区分で言うところ、明治時代初頭からの士族の子弟に続き、地主や商店主の子弟達も転職を始めた時期にあたる。本節では、この時期に注目してみたい。なぜなら、この時期に“自分で職業を変えることができる”と思うことが可能であった、いわば“転職の第一世代”の青年達のありようが、転職悪玉説に影響した可能性があるからである。

当時としては比較的高学歴であったと言えるこの層の青年達の就職については、明治時代に出版された青年向け雑誌の言説から検討を行ったキンモンス（1999）が詳しいが、本論に必要な部分を要約すれば以下になるだろう。

明治維新当初は学歴さえあれば「乱世的な出世」も可能であり、青年達には官吏となって富貴を獲得するために勉学するという意識が浸透していた。日清戦争（1894-1895）による好景気を経験した後は、青年達の関心は実業界へも向かうようになり、「成功」という言葉が流行した。時代を通じて青年達は「立身出世」を目指し、1890年代になるとそれらの青年達の大半はホワイトカラーとして就職することになった。しかし一方で、高等教育への入学難や学歴の市場価値低下などの問題もあり、実際に明治時代後期には新卒の初任給も総じて低下した。そして1900（明治33）年から1903（明治36）年の不況時には、初の学卒失業現象が見られた。その結果、高学歴を得たところで、明治維新の頃のような「乱世的な出世」は望めないものとなった。そのため、立身出世のための競争や就職を拒否する「煩悶青年」と呼ばれる高学歴青年が「かなりの割合で」見出されるようになり¹⁶⁾、政府や教育関係者、ジャーナリズムを巻き込み問題視

15) 中村（1999）は、これに続く1930（昭和5）年代後半より、戦時の兵役などを要因として、父と子の職業を変更する世代間職業移動、地域移動、最初の従業先とは無関係な職に転職する比率がいずれも増加し、移動が常でない強さで現れたことをSSM調査（Social Stratification and Social Mobility Survey：社会階層と社会移動調査）のデータにより確認している。

16) キンモンス（1999）によると、「煩悶青年」の存在が世間の耳目を集めたきっかけは、1903（明治36）年に、当時18歳だった第一高等学校生・藤村操が華厳の滝に投身自殺したことである。それ以後、華厳の滝で数十

されるようになった。

これら煩悶青年の姿は年長者には不可解な存在に映り、「ごく一部の識者を除いては、当時の社会通念からの逸脱というレッテルを青年に貼るのが精一杯」(加藤, 2002)であったという。このような、わが国で最初に自主的な転職が可能になった層の一部において、就職しなかったり、すぐに職を辞めてしまったりするという当時の社会通念(たとえば、勤勉思想)に反するような態度が生じたことが、転職悪玉説に一役買った可能性があるのではないだろうか¹⁷⁾。

4.3 「転職」の広範な普及

さて、煩悶青年を生み出しながらではあったが、明治時代後期の高学歴青年達は官員や会社員などのホワイトカラーとして就職することになった。しかし、その後の就業状況はどうだったのだろうか。その人たちはその企業等に定着したのか、それとも転職したのか。尾崎(1967)によると、「第一生命五十年史」に、1908(明治41)年に5名の帝大卒の学士を採用したものの、1年半で5名全員が辞めたという記録があるとのことである。しかし、残念ながら、それ以外に高学歴青年達の就職後に関する資料を本論では現時点までに得ることができていない¹⁸⁾。

では、明治時代後期ではなく、大正時代に入ってから転職を開始した人々、つまり、高等小学校卒などの人々は、どのように転職を経験したのだろうか。その一端を、1927(昭和2年)発行の大阪市立職業紹介所の資料(南ほか編, 1987)に見ることができる。これは、当該紹介所を介して就職し、勤続5年を果たしたことで表彰された53名が自らの略歴を記したものである¹⁹⁾。それによると、53名の大多数が地方の農村出身で、かつ明治時代後期に高等小学校等を卒業・中退し、その後、いくつかの職を経て大阪にて店員や工員などの現職に就いた人ようである²⁰⁾。この53名は大阪市から表彰さ

名もの若者が後追い自殺をしたり、厭世感を記した遺書「巖頭之感」がベストセラーになったりする現象を引き起こした。

- 17) 本論2章で触れたように、日本国語大辞典に掲載の最古の用例は、「転職」については1907(明治40)年の国木田独歩の作品から、「定職」については1911(明治44)年の正宗白鳥の作品から引用されていたが、キンモンス(1999)によれば、国木田は自らが煩悶青年であり、また正宗は「煩悶青年に人気のあった」作家である。このように煩悶青年と親和的な作家の作品において早くから「転職」「定職」という言葉が使われていたことから、これらが高学歴な煩悶青年達と密接に関わる概念だったことがうかがえる。
- 18) 日立総合計画研究所(1985)は、ホワイトカラーの勤務に触れた第二次世界大戦以前の資料が少ない理由として、国内の労務管理の歴史が比較的浅いことに加え、関心の対象が生産労働者としてのブルーカラー中心であったことをあげている。
- 19) 資料の収集方法についての記載は無いが、内容から推測する限りでは、紹介所からの数項目の質問に対して、郵送による文書回答をしたものようである。人により、必要最低限の回答をしてあるものから、文学風のものまで、様々な語り(ナラティブ)のスタイルが見られ興味深い。
- 20) しかし、興味深いことに、53名分全部合わせて5万字ほどの文書の中に、一度も「転職」という言葉は登場していない。その代わりに、次のように経緯として記述されている。「伯父の家にて伯父の商売に従事して居たのであるが、都合上四年目に国元へ帰り、間も無く東京へ行き、思ふ一定の職業もなく一年程経って帰国、家事の都合上農業に従事して居たが思ふ処あり大正十一年二月上阪、九条紹介所の手を経て只今の金門商会

れた人々であり、平均以上に“勤勉な”人々であったと言えるだろう。しかしそれは、当時は店員や工員として5年程度勤めただけでも表彰されるほどに珍しいことであったということの裏返しだと言える。実際、同紹介所の仲介による勤続者総数7,357名のうち、5年以上の勤続者が297名であるのに対し、6,164名が勤続3年未満であったと同書は報告している。

しかも、このような頻繁な転職の状況は、必ずしも旧来の身分差やそれを背景とする学歴とのみ関係していたわけではなかったようである。たとえば「産業労働における日本人の勤勉性」について包括的な分析²¹⁾を行った日立総合計画研究所(1985)は、「明治、大正期に於いては、一部の基幹労働者を除き多くの産業労働者の勤務状況、あるいは働くことに対する意識は極めて低調で、およそ産業労働者としての資質、条件を具備しているとは言い難かった」とし、「自分の勤める会社に対する帰属意識も希薄で高い離職率と低い定着率がそのことを表している。日本の産業労働者の会社に対する高いロイヤリティは当時はまだ存在せず、多少の労働条件の差などにより、ひん繁に労働移動をくりかえしていたのである」と指摘している。ここからは、少なくとも産業労働の現場では、明治時代後半から昭和にかけてさかんに喧伝された“勤勉な日本人”イメージとは著しく異なる実態があったこと、また、結果として転職がいわばデフォルトになっていたらしいことがうかがえよう。かくして、転職は、大正時代から昭和時代の初頭にかけて、概念としても行動としても人々の間に膾炙されていったと見られる。

以上の本章を小括すると、明治時代の「転職」の特徴として、①江戸時代から引き継がれた身分制の階層順に転職が開始された、②比較的高学歴であった転職第一世代の、「煩悶青年」を含む在り様が転職のイメージ形成に一役買った、そして、結果として③明治時代後半→大正時代→昭和時代の初頭にかけて転職は広範に普及し、概念としても行動としても人々の間に膾炙されていった、ということが言えるだろう。ここまで述べてきた転職悪玉説に関連する主に明治時代の出来事を、表1の年表にまとめた。

5 言説の検討—転職悪玉説の誕生

さて、ここまで検討してきた諸々の経緯を通じて、いよいよ明治時代後半から転職悪玉説が文献に登場し始める。本章では、当時出版された書籍4件から、転職に関する言及を取り上げて検討する。4件のうち、3件(以下の5.1, 5.2, 5.3)は、本論2章で触れた国立国会図書館の近代デジタルコレクションで「転職」でキーワード検索してヒットした、現代と同じ語義での「転職」という表現が見

へ入社、現在に至るのです」(p. 23)。また、「幾度か職をかへようと思ったかしのれない」というような表現が2, 3名の回答中でみられるものの、全般に“職を変える”に類する表現もほとんどみられない。ちなみに、「転職」という言葉は、数回登場している。当時は「転職」という言葉のユーザーが比較的高学歴の青年や一部の知識人に留まっていたのかもしれない。

21) ここで日立総合計画研究所が収集した資料は、「出勤率(または欠勤率)、離職率(または定着率、勤続年数)等の統計類とその勤務ぶりを客観的に記述したいくつかの資料」である。

転職悪玉説の誕生をめぐる試論

表1 転職悪玉説に関連する主に明治時代の出来事

西暦	年号	歴史上の出来事	中村(1999)による社会的移動の順序	本論で取り上げた事象
1868年	慶応4年/ 明治元年	改元	明治初頭から士族の子弟が移動開始	
1874年	明治7年			「布告類編」で“公人の転籍”の意味で「転職」が使われる。
1886年	明治19年		「寄留」が個人単位の申請になる。	
1889年	明治22年	大日本帝国憲法の発布		
1890年	明治23年			「労働」という言葉の定着(武田, 1999) この頃から、ホワイトカラーへの就職が開始。
1894年	明治27年	日清戦争開始		
1895年	明治28年	日清戦争終結		
1900年	明治33年		この頃から地主・商店主の子弟が移動開始	不況で初の学卒失業者が出る(～1903年迄) 二宮尊徳の逸話が教科書に登場 ★岸本能武太著「倫理宗教時論」に転職悪玉説
1902年	明治35年			「成功」ブームが始まる。
1903年	明治36年			「煩悶青年」が注目される。
1904年	明治37年	日露戦争開始		
1905年	明治38年	日露戦争終結		
1906年				★永田岳淵著「新時代之青年」に転職悪玉説
1907年	明治40年			国木田独步著「暴風」に「転職」の用例 ★波多野烏峰著「成功の順路」に転職悪玉説
1909年	明治42年			夏目漱石「それから」に「職業替」の用例 ★伊藤圭堂著「就職手引草」に失業自己責任説
1911年	明治44年			正宗白鳥著「泥人形」に「定職」の用例 二宮尊徳が小学校唱歌の題材になる。
1912年	明治45年/ 大正元年	改元		
1920年	大正9年		この頃から自作・小作農の子弟が移動開始	
1924年	大正13年			最早期の二宮尊徳像が愛知県で小学校に設置される。
1926年	大正15年/ 昭和元年	改元		
1927年	昭和2年			大阪市立職業紹介所の資料の発行

本論中の引用文献をもとに筆者作成

★は5章で引用した文献である。

られる最古の3件である。出版年代や文語文体、内容から判断すると、ある程度の学歴（少なくとも高等小学校卒以上）を有する読者を対象に著わされたと推測される。また、同時期に出版された尋常小学校終了程度の読者を対象にしていると推測される1件（5.4）も加えた。

なお各書は、原文が長文の文語体であるため、筆者が口語体にて要約した。「転職」という言葉が使われている箇所は、当時の言葉のニュアンスを示すため、とくに原文のまま記し、「」で括弧にすることにする。

5.1 岸本能武太（1900／明治33年）「倫理宗教時論」

『第十四 教役者の転職と其の品行』（pp. 276-280）

世間ばかりか、キリスト教徒や伝道師にも、禁酒・禁煙・廃娼・廃娼等が、キリスト教徒独自の考え方だと思っている人がいる。しかし、飲酒等の行為は、キリスト教徒だから止めるべきなのではなく、誰であってもそれらは止めるべきことである。最近、キリスト教の牧師や伝道師の中に「其の職業を転じ、教役界を去りて実業界に転籍するもの甚だ少からず」。しかし、理由はいろいろあるだろうから「此等の教役者の転職は、実にはやむを得ざることと言うべし」。私が悲しく思っているのは、そういう人の多くが、教役界を去ると同時に、主義、道徳、正義などを捨てて豹変してしまうことだ。思ってもみよ、彼らは一介のキリスト教徒であるばかりではなく、多くの信徒の心の支えとなってきたのだ。彼らがキリスト教を捨てるかどうかについては何も言わない。私は職業に貴賤があるとも信じていない。また、人は職業を変更するのに合わせて、その品行をも転じることができるとは信じていない。

この本は、倫理と宗教が分かち難く結びついているという著者の岸本（宗教学者・社会学者）²²⁾の信条に基づき、国家主義や正義に関する時事について書かれた評論集である。

キリスト教の伝道師から実業界への転職について論じている上記の箇所で、著者は全体としては転職をあまり肯定的に扱っているわけではない。それでも当事者の事情を汲んで「実にはやむを得ざることと言うべし」と一定の理解を示している。

ただ、転職について「教役界を去りて実業界に転籍するもの」と、“職業替え”と言うよりは、“身分替え”“戸籍替え”であるかのような表現を用いていることには注目すべきである。たとえば、今もし誰かが「教師を辞めて、会社員に転籍した」と言ったとしたら、その表現にわれわれ現代人は旧弊な封建社会のニュアンスを感じ取るのではないだろうか。

また、ここで著者は、転職とともに主義、道徳、正義などを捨てて豹変してしまう人がいることを嘆いているが、その背景には、当時の人々が職業と人格を不可分に結びつけて捉えていたことがあるのだろう。だからこそ、著者が批判するように転職当事者による“職業さえ変えてしまえば人格だって変えても構わないだろう”という言い分が出てくる余地もあったのだと思われる。

22) 岸本能武太（1865-1928）のプロフィールは、「同志社神学校卒 ハーバード大学で宗教学を学ぶ シカゴの万国宗教学会に出席 早稲田で比較宗教学を講じる 姉崎正治らと比較宗教学会を設立 日本女子大で英語を教える」（徳富蘇峰記念館ホームページ）というものである。

この文書には、明らかな転職悪玉説は見られない。しかし“職業=身分=人格”とでもでも言うべき、職業に関するある種の属性主義的感覚を読み取ることができる。そのような感覚の下では、転職して就く職業によって当事者の人格の評価までも上昇したり、逆に下落したりすることもあっただろう。転職悪玉説の背景には、このうち、後者のタイプの転職をした人に対する非難もあるのかもしれない。

5.2 永田岳淵（1906／明治39年）「新時代之青年」

『第十一信 転職希望の青年に与うる書』（pp. 146-156）

（就職斡旋の依頼に対して）私も君の転職の意志が確固たる目的を持っているのならは何も言わないが、今までの話からすると「その転職希望は、徒に漫然たる感情に制せられたる無主義無目的の企画に過ぎずして怯懦なる軍人の潰走敗北に異ならざるなり」。一時的な不安に襲われて浮足立つのは止めなさい。敵の致命的弾丸は君がまさに一步をあげようとするのを待ち構えているのであり、誠に危険極まる境界にいるのだ。現状に勉め、現状の日課を履行する努力をなさい。また、君が今の職業では自分の目的を達しないと考えるのも誤りである。私も実業とは全く違う軍隊に徴用されたが、今から思えばそこでの訓練は実業家としての生涯に大いに役立つものであった。もし現局が君を棄てようとするなら君はそれを追いかけるべきだ。一里逃げたら二里追いかけ、五里逃げたら十里追いかけるべきだ。現局は君の恋人のようなもので、お互いに親しんで離れなければ、いずれ君の未来の令夫人になるのは間違いない。それなのに、どうして軽率に相思相愛を台無しにするような無節操をする必要があるのか。

この本は、功成り名を遂げた人物から青年に差し出された手紙の体裁を用いた全30章から成る訓話集であり、他に「就業せる青年に与うる書」「逆境に育ちたる青年に与うる書」といった章がある。著者の永田岳淵²³⁾は、当時は出版元の実業之日本社の記者であり、本書の前後にも「苦学力行の人」「青年立志編」（1909）などの自己修養本を出版している。

さて、この第十一信は、「転職希望の青年」に送った手紙として、まさに「転職」に対する主張を記した文書であり、「一、勤労を避けんとする精神」「二、無意義の退却は潰走なり」「三、人生百戦我が経練の具」「四、生涯を寸断すべき無知無謀」の4節で成る。各節のタイトルに明らかなように、転職は、勤労を避ける己の弱さによって生じる無知無謀な行為として厳しく諷められ、現状に専心努力することが強く奨励されている。

また、この節で特徴的なのは、「軍人の潰走敗北」「致命的弾丸」「一里逃ぐれば」といった戦争関連の比喩が頻出していることである。本書が出版された1906（明治39）年は、大國ロシアに勝利した日露戦争（1904-1905）の直後である。そのため、戦場の状況に譬えるのは、読者である青年を転職ではなく“現局”に留まらせる上では当を得ていたのだろう。また、「恋人」「未来の令夫人」など、恋愛の喩えも持ち出されており、若い男性への説得力を増すそうとする意図もうかがわれる。

23) 永田岳淵（1871-1971）は、元読売新聞記者。1904（明治37）年に実業之日本社に入社し、後には理事になる。さらに第15期衆議院議員（1924年5月-1928年1月）も歴任した（馬，2006，p. 52）。

それにしても、「漫りに転職を口にする勿れ、他場は畢竟最後の失敗、最後の零楽也」（安易に転職を口にしてはならない、他の職に移ったところで結局は失敗して落ちぶれるだけだ）とは、あまりにも否定的で悲観的な転職悪玉説である。ここまで転職を完全否定する真意はどこにあったのだろうか。

5.3 波多野烏峰（訳著）（1907／明治40年）「成功の順路」

『第9章 処世難 二 転職問題』

（主人公の青年は）知人による好意の転職斡旋に応じるべきか否か迷う。“転ぶ石には苔は生えぬ”と“賢き牧者は、牧場を転ず”のどちらも正しいと思うゆえである。しかし、よく考えてみたら、自分は、自分の才能を不当に高く評価しすぎており、職務が自分に合っていないとか、上司に人を見る目が無いとかいう不満を持つことで職務を全うしてこなかった。それゆえに成功から遠のいていたのだと気づいた。偉業を成す人はどの職についてもそこで能力を発揮し、その能力が一つのことには結集したときに類い稀な偉業を成すのである。そうであるなら、政党に入って非凡な才能を発揮する者は、かならずや田んぼに入っても非凡の大才能を発揮するだろう。そして、自分が現職では将来的に発展の見込みがないと思うことは、甚だしい誤謬だということということが分かったので転職を思い止まった。

この本は、フランスの作家オクタブ・フィエーの小説「貧青年録」を、外交に通じていた著述家である波多野²⁴⁾が翻訳したものであり、貧しい青年が成功を手中にするまでの自己語りの成功譚である。しかし、内容は小説というよりは自己啓発本に近い。「成功の順路」という書名および出版年から推測すると、本論2章で触れた日清戦争を契機に訪れたという「成功」ブーム²⁵⁾を背景として出版された本と見られる。

ここで主人公は現状への不満を“自分には本当は（たとえば、政治家になれるような）大きな才能があるのだが、今は修練のために地道な仕事（たとえば、田んぼの農作業）をやっているのだ”と読み替えて転職を思い止まっている。主人公のこのような自己語りは、読者である（とくに地方の）青年に将来への大志や自己確信の感覚を与える一方で、実際には部不相応な将来など夢想することなく（すなわち、それを目指して転職などすることなく）、地道な現状に留まり続けることを促す側面もあったのではないだろうか。

いずれにしても、この文書も「今、現職に就て、将来発展の見込みなしとなすは、甚だしき誤謬」とし、転職を安易な行為だとして断じている。すなわち、この文書においても明確な転職悪玉説が見られると言える。

24) 波多野春房（ペンネームは烏峰）は、1885（明治18）年生まれ。アメリカ留学を経て東京で英語塾や通信社を経営するとともに著述業にも従事、一方で、汎イスラム主義やインド独立運動の支援者として自らもイスラム教徒となり活動するが、第二次世界大戦後の軌跡は不明である（久保田、2005）。

25) 成功ブームについては竹内（1977）が詳細を論じている。同者によると、このブームは1902（明治35）年頃から始まり、戦争の勝利による大国意識や新世紀の開幕による観念上の機会拡大意識に加え、産業資本の確立による社会的地位の上昇移動の機会が増大していたことを背景としている。

5.4 伊藤圭堂（1909 / 明治42年）「就職手引草」

『人は何故に職を失ふか』『職業と家業』

世の失業者は、職業にありつこうと思うならば、まずは失業した原因について考えてみよ。熟考すればすぐにわかるだろう。健康上の理由、労働に堪えられなかった、不平、放蕩、父母兄弟との不和などと。それらは改善しなくてはならない。人は必ず家をなし、家があるなら必ず業がある。ゆえに職業とは家業なのである。いやしくも人であれば、必ず職業があるはずだが、実際は無職徒食の輩が幾千万人もいる。これは帝国の盛衰に関する一大問題である。失職している輩は、奮闘努力して自分の好む進路で職業を選び、不生産的な人にならないようにすべきだ。こんなに進歩して幸福な御世なのに、むやみに不景気を主張して、職を得ることに苦悩したり生活を心配したりするのは、つまりは、自分の愚かさや見識の狭さを表明しているようなものだ。人が競争原理に立って、身を立て、家を興そうとするときに、意志薄弱ではどんな事業も成功することはない。

この本は、巻頭言によると、不景気によって「抑不生産的な人」である無職者が増えたことを「国家の不利不幸」と憂慮し、無職者に資する情報を提供するために著された、とくに東京における就職マニュアルである。数行から1頁程度の職種別の簡単な案内を主とするが、借家の借り方などの生活情報も掲載されている。なお、著者の伊東圭堂については残念ながら経歴を見つけることはできなかった。

この本は、上記の「新時代の青年」（1906）「成功之順路」（1907）と近い年代に出版されているが、紹介されている職業が、清掃請負、小間物行商などに限定されており、また「徒弟夜学校」の説明には丁稚奉公への言及もあることから、読者層としては義務教育終了かそれ未満の人々が想定されているようである。本論2章で取り上げた中村（1999）の研究によれば、1900年代までに移動の可能性を了承していたのは比較的高学歴な人々である。この本の読者にはまだ主体的な職業替えとしての転職という感覚が実感できていない頃だったかもしれない。

そのような状況に乗じているのか、著者は「職業＝家業」と明確な属性主義的視点で断言しており、まるで旧時代の位置に読者を押し留めようとしているかのように見える。また、本書には、失業者である読者を就職へと叱咤する文言が並ぶが、他方で失敗はすべて自己責任に帰されている²⁶⁾。ここに本論2章で述べた勤勉思想と自己責任のつながりの片鱗がうかがうことができる。探した限りでは、この本に「転職」という言葉は見当たらなかったが、仮にあったところで、ほぼ確実に転職悪玉説を主張していたであろう。

以上の4例の検討から、転職悪玉説の誕生をめぐることは次のようなことが導かれよう。すなわち、まずは①「転職」概念の誕生当初から転職悪玉説も誕生していること、また、それらは②少なくとも

26) たとえば同書では、「薄志弱行の徒、身体軟弱なる者」は、どんな困難に遭っても「恰も武士か戦場に臨みて、生命を犠牲に供する勇気を鼓舞して、進まざる可らず」ような姿勢が必要であり、一度二度の挫折で懊悩とするようでは「人糞製造所にも、ならざる様な」みじめな境遇に陥るが、「事業其のものは完全なりと雖でも、これに従事する人が勤勉と忍耐の二つを欠く」ならばそれは必然であると説く。

文言の上では非常に厳しい表現で示されていること、③転職は勤労とは正反対の怠惰な行為・態度だと断じられていること、そして④この①～②の背景には、江戸時代から持ち越されている身分に基づく属性主義的な職業観が潜在しているらしいこと、である。

6 まとめと展望

本論の目的は、転職悪玉説の起源と考えられる点まで遡り、そこから実際の転職悪玉説の言説となって文献に登場するまでの過程を整理することによって、転職悪玉説が誕生した背景要因を可能な限り明らかにすることであった。

そこで、本論では、まず、転職という言葉の語義の変化、および、「はたらくこと」の感覚の変化への注目から、現代と同義の職業替えという意味での「転職」概念の誕生時期として明治時代後半を想定した。次に、それに先行する江戸時代後期に遡り、当時の人々が柔軟に職業替えをしていたもののそれが転職として認識されていなかったこと、しかし、一部に遊民や無宿などの職業替えには既に批判的な観点があったこと、そこに勤勉性を強調する強力な思想運動が背景として加わったことなどを論じた。そして、明治時代に入り初めて人々に転職が可視化されることになったこと、転職可能性に旧社会の階層に基づく順序性があったこと、比較的高学歴な青年達の高学歴青年を中心とする転職第一世代の登場と動向、その後の大正・昭和時代にかけての転職の後半な普及について詳細に論じた。そして、転職悪玉説の再早期の例と考えられる明治時代後半の本4件の内容について検討した。

本論による成果があるとすると、転職悪玉説は、転職概念が誕生したと同時に誕生しているらしいことを明らかにしたことをあげたい。これは、筆者の知る限りでは従来の研究がほとんど目を向けてこなかった側面である。ただし、ここであえて「らしい」というのは、転職悪玉説論と転職概念が同時に誕生したのではなく、むしろ江戸時代には転職悪玉説のベースになるような何某かの観点や価値観が強くあり、そこに明治時代になって近代的な仕組みとして「転職」が加わったがゆえに転職悪玉説が誕生したという機序であった可能性を排除できないからである。つまり、転職悪玉観が先にある、その上に転職という現象が生じたのかもしれないのである。

本論5章で見たように、再早期の転職悪玉説の文言は非常に厳しいものであった。しかし、なぜそこまでの否定がされるかという点は本論では追究しきれなかった。ただ、本論で検討した範囲で推論するならば、本論4章で触れた日立総合計画研究所（1985）が述べるように、当時は「働くことに対する意識は極めて低調」で「多少の労働条件などにより、ひん繁に労働移動をくりかえしていた」という状態があり、それが社会を営んでいく上の大きな支障になっていたのかもしれない。そうだとすれば、転職悪玉説の厳しい文言もその当時の時宜には敵っている部分もあったのだろう。しかし、今はもはやそのような時代ではない。われわれは自分の意志で職業を選ぶことができるし、また、意志によらず退職や転職を迫られることもある。近世社会の視角で現代のキャリアを無批判に見てしまうことの危うさを、本論の検討は示唆しているように思われる。

引用文献

- 安藤りか (2019) 「転職の意味の探求——質的研究によるキャリアモデルの構成」 北大路書房
- 阿部 昭 (1999) 江戸のアウトロー——無宿と博徒 講談社
- 荒川章二 (2002) 規律化される身体 (編) 小森陽一・酒井直樹・島蘭進・千野香織・成田龍一・吉見俊哉「感性の近代——1870-1910年代」 岩波書店 (pp. 169-204)
- 幾田伸司 (2005) 戦後初期教育国語教科書における二宮尊徳についての考察 全国大学国語教育学会国語科研究 108, 123-126.
- 伊藤圭堂 (1909) 「就職手引草」 弘文館
- 大阪市経済部 (1987) 勤続者とその略歴 (編) 南博・渋谷重光・岩崎隆始・伊勢戸佐一郎「近代庶民生活誌」 三一書房 (pp. 13-55)
- 尾崎盛光 (1967) 「日本就職史」 文藝春秋
- 籠谷次郎 (1997) 二宮金次郎像と楠木正成・正行像——大阪府小学校における設置状況の考察 社会科学58, 1-35.
- 加藤 潤 (2002) 近代言説としての「青年期」 名古屋女子大学紀要48, 23-36.
- 岸本能武太 (1900) 「倫理宗教時論」 警醒社
- キンモンス, E.H. (1995) 「立身出世の社会史——サムライからサラリーマンへ」 玉川大学出版部.
- 久保田文次 (2005) 孫文・梅屋庄吉とインド革命家の交流——バルカトゥッラー, バグワーン・シン, R・B・ボース, 波多野春房をめぐる 史艸46, 164-208.
- 大辞林 第四版 (2019) 三省堂
- 竹内 洋 (1977) 成功ブームの台頭と変容: 雑誌『成功』——一九〇二—一九一五年にみる ソシオロジ 22-2, 103-118.
- 武田晴人 (2008) 「仕事と日本人」 筑摩書房
- 千輪性海 (1906) 「世渡のしるべ」 東京書院
- 徳富蘇峰記念館公式ホームページ
- 「岸本能武太」 <http://soho-tokutomi.or.jp/db/jinbutsu/5772> (2021年4月30日閲覧)
- 中村牧子 (1999) 「人の移動と近代化——『日本社会』を読み換える」 有信堂
- 永田岳淵 (1906) 「新時代之青年」 実業之日本社
- 日本国語大辞典 第二版 (1972) 小学館
- 萩原牧子・照山博司 (2016) 転職が賃金に与える短期的・長期的効果—転職年齢と転職理由に着目して—Works Discussion Paper16
- 波多野鳥峰 (1907) 「成功の順路」 実業之日本社
- 日立総合計画研究所 (1985) 「産業労働における勤勉性に関する研究」 総合研究開発機構
- 深谷克己 (2006) 「江戸時代の身分願望——見上がりと上下無し」 吉川弘文館
- マイナビ (2021) 「転職動向調査2021年版」を発表
- https://www.mynavi.jp/news/2021/03/post_30246.html (2021年4月30日閲覧)
- 馬 静 (2006) 実業之日本社の研究——近代日本雑誌研究史への序章 平原社
- 南 和夫 (1978) 「幕末江戸社会の研究」 吉川弘文館
- 守本順一郎 (1985) 「徳川時代の遊民論」 未来社
- 安丸良夫 (1999) 「日本の近代化と民衆思想」 平凡社
- 横田冬彦 (2000) 芸能・文化と「身分的周縁」 (著) 久留島浩・高埜利彦・塚田孝・横田冬彦・吉田信之「シリーズ近世の身分的周縁6 身分を問いたず」 吉川弘文館 (pp. 29-48)

名古屋学院大学論集

リクルートワークス研究所（2020）全国就業実態パネル調査 2020データ集（全国版）

https://www.works-i.com/research/works-report/item/200611_jpsed2020data.pdf（2021年4月30日閲覧）

渡辺恒一（2000）近世前期の社会と「身分的周縁」論（編）久留島浩・高埜利彦・塚田孝・横田冬彦・吉田信之「シリーズ近世の身分的周縁6 身分を問いただす」吉川弘文館（pp. 4-17）